

審査の結果の要旨

氏名 パンノイ ナッタポン

本論文は、人の暮らしの中で生み出された文化遺産と生活環境の総体をリビング・ヘリテージと名付け、その地域の観光影響の予防策に向けた関係主体協働の展開プロセス、関係主体協働の課題の解決方法、および関係主体協働における促進主体の役割を明らかにすることを目的としている。

論文は3つのパートから成っている。第1部は序論、第2部は本論、第3部は結論である。

第1部は3つの章から成っている。

第1章では、研究の目的、方法、対象について述べ、用語の定義をおこない、既往研究を整理している。

第2章では、研究の枠組み、分析視点および仮説を提起している。リビング・ヘリテージ地域の観光影響の予防策の必要性について論じ、関係主体間の協働の必要性を示し、そのうえで、そうした協働を構築するプロセス、課題解決の方法、協働を促進する主体の存在について明らかにするという本論文の枠組みを明示している。

第3章では、本論文が対象としている石見銀山地域の概要を述べると共に、新聞記事、詳細なインタビュー調査、アンケート調査の併用による分析という本論文の研究方法を述べている。また、第2部の論述の基礎となる石見銀山での文化遺産保存活動の年代区分が根拠と共に示されている。

第2部は4つの章から成っている。

第4章では、世界遺産登録の前史というべき1957年から1995年までの石見銀山地域における文化遺産保存活動の概要が、行政と住民の関係を軸に年代別に記述されている。

第5章では、1996年から石見銀山協働会議が開催された2005年までの地域の関係主体の間に展開された議論と主体間の関係性に着目し、行政と住民と住民以外の市民との関係を軸に考察している。この時期に、石見銀山地域の価値に対する共通認識が形成されたことと同時に観光活用に伴う課題に関する共通認識がかたちづくられたこと、それに対処するための協働の必要性が認識され始めたことを明らかにしている。

第6章は、2005年に実施された石見銀山協働会議の実態を明らかにすることが目的である。同協働会議が最終的にまとめた行動計画までの経過を詳細にあとづけ、行動計画の内容のキャン間的な検討を行っている。なぜこのようなプロセスが可能であったかを考察し

ている。

第 7 章は、世界遺産登録に伴う観光影響の予防策がどのように議論され、実行されていたのかを時系列を追いつつ、詳細に明らかにしている。

第 3 部は 2 つの章から成っている。

第 8 章は、本論文の目的に沿って、第 4 章から第 7 章までの経緯を総括し、石見銀山地域における観光影響の予防策に向けた関係主体間の協働の意義を総合的に考察している。また、世界遺産登録による効果を明らかにし、関係主体協働から得られた示唆を他のリビング・ヘリテージ地域において適用する際の留意事項を論じている。

最終の第 9 章では、リビング・ヘリテージ地域における観光影響の予防策に向けた関係主体協働の展開プロセスについて、3 つのステージに分けてそれぞれの段階の条件を整理している。同じく観光影響の予防策に向けた関係主体協働の課題克服のためには、要因を 5 つに分析し、それぞれの課題ごとの対処策を論じている。同じく関係主体協働における促進主体の役割については、公平性の確保や意志決定の有効性の確保など 7 つの論点を提起している。

以上、本論文は、リビング・ヘリテージ地域における観光影響の予防策のありかたについて、石見銀山地域の世界遺産登録前後のプロセスを詳細に追うことによって具体的な課題を明らかにし、さらにその意義を一般化することに成功している。ひろく観光計画立案とそこへの関係主体の参加の在り方に関して有用な知見をあたる論文として高く評価することができる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。